

**米** 国に手ひどく傷を負わせた

い。「悪のイスラム政権」、中でもサウジアラビアとパキスタンの政権は断じて倒す。これが9・11に明らかになったオサマ・ビンラディンの願い事である。

二つの願い事を叶えるために、ジョージ・ブッシュは残業して頑張っている。実際、彼がいなければオサマ・ビンラディンは目標を達成できないだろうし、できたとしても短期間では無理だろう。

G・ブッシュはイラク侵略を準備している。これに反対する動きが大きくなりつつある。まず米国内でここ数週間に二つのグループの声が高くなってきた。

一つは「旧ブッシュ一族」と言われるもので、父ブッシュと彼の取り巻きである。ジェームズ・A・ベーカー、ブレント・スコウクロフト、ローレンス・イーグルバーガーが強く警告している。彼らは第一次ブッシュ政権に関わっていた。今、国連の承認なしにイラクを侵略する事は賢明でないし、必要でもない。米国にとって正しい結果を生むと彼らは見ている。

もう一つは軍の反対だ。元・空軍中將であるブレント・スコウクロフト、湾岸戦争の時に米軍を指揮したノーマン・シュワルツコフからも反対意見が出ている。それからアンソニー・ジニ。長年中東作戦の指揮官で、イスラエル・パレスチナ問題について現政権の特使をしてきた人物だ。コソボでN

## ブッシュは

# ビンラディンの手先である

ATO軍の指揮をとったウェズリー・クラークも反対している。彼らは口をそろえて「イラク侵略は」軍事的に難しく、必要性がない、米国にとってマイナスの結果を招くと言っている。退役した司令官たちが、多くの現役軍人たちに代わって発言しているのだらう。

共和党の多数派指導者リチャード・アーミー下院議員、ベトナム退役軍人でネブラスカ州選出の共和党チャック・ヘーゲル上院議員も反対している。こうしてブッシュの提案する冒険に反対する内部勢力は大きなものとなった。このリストに民主党からは誰も入っていない。この議論になると民主党は恥ずかしいほど極端に臆病になっている。

**つ** ぎに米国の友好国や同盟国からの反対がある。カナダ

は侵略を正当化する証拠がないと言い、ドイツは決して軍隊を送るつもりがないと明言した。ロシアはここ数週間、イラク・イラン・北朝鮮の「悪の枢軸」三国と、これ見よがしに会談を開いてきた。「穏健派」と呼ばれるアラブ諸国、サウジアラビア、ヨルダン、エジプト、バーレーン、カタールは自

国領内をイラク攻撃に使わせないと、われ先に宣言している。イラクに対抗するグループの会議が米国で開かれたが、クルド人は出席を拒否した。米国政府の息がかかっていたからだ。

米国はイギリスでもつまずいている。トニー・ブレアは、米国が彼の助けになるようなものをくれない(「侵略を正当化する」具体的な証拠をくれない)と愚痴をこぼしながらも、変わらずに忠誠を誓っているように見える。しかし、イギリス市民の大半が軍事行動に反対だ。ブレアは、閣内にロビン・クックをはじめ反対勢力があることを知っているから、閣議でこの問題を取り上げようとしない。確かに、G・ブッシュには信頼

できる支持者がいる。アリエル・シャロンとトム・ディレイ「共和党下院副院内総務」、まあそんなところだらうか。

**「米** 政府は批判に何と答えているのか」  
G・ブッシュはこうした議論を「気が狂っている」とけなした上で、また「侵略を」決定していないと言つ。彼の言葉を信じる者はいない。チェイニー副大統領は、

たとえ再び査察団を受け入れたとしても【注】、サダム・フセインはやつつけられて当然だと(ブレアでさえ受け入れられないことを)主張している。ラムスフェルド国防長官は、米国がなすべきことを実行すれば、他の国々はついてくるだらうと言つ。それが指導力というものだぞうだ。

今やG・ブッシュを仲間にしたタカ派から見ると、いくら反対があっても関係がない。援護射撃がないまま進むほうがむしろ都合だ。誰も米国のすることに盾突けないし、刃向かえば必ず罰を受けると、世界に見せつけることができる。サダムは米国を馬鹿にしたから、彼が何をしようかと、誰が何と言おうとこらしめてやる。サダムをつぶせば、世界の国々は、米国が世界の支配者だとわかり、米国に従わざるをえないと思うだらう。タカ派はそう信じている。

だから、新しくできた国際刑事裁判所に対しても、米国は同じ態度をみせる。同裁判所の権限が及ばないように、米国民だけが特別扱いを受ける保障を求めて、他の国々との二国間合意を推し進めている。頭がおかしくなつたかと思えない行動だ。ここでもタカ

イマニュエル・ウォーラーステイン 1930年生まれ。社会学者。ニューヨーク州立大学ビンガムトン校付属フエルナン・ブロード・センターの所長を務めている。「近代世界システム論」提唱者。

翻訳・訳注 / 安濃一樹・別処珠樹。本文中( )は著者注、[ ]は訳者注。

Immanuel Wallerstein, Commentar No. 9( September 1, 2002 ) "George W. Bush, Principal Agent of Osama bin Laden." Fernand Braudel Center, Binghamton University  
http://fbc.binghamton.edu/commentr.htm  
著作権 / 原文に関するすべての権利はイマニュエル・ウォーラーステイン本人にある。  
翻訳および記事掲載に際しては本人の許可をえた。



イラストレーション / 吉岡ユカリ

派が考えていることは同じで、米

国は世界の支配者だから国際法を

守らなくていいというわけだ。

当然のことだが、反対する人た

ち 友人としてであって、アル

カイダのような反対ではない

が声をそろえて、米国は自分の足

を撃とうとしている。そんなこと

をすれば、周りが大変な損害を被

ることになる、と言っている。予

定されている行動は（他国への侵

略は攻撃であり、攻撃は戦争犯罪

だから）国際法違反であるという

事実を別にしても、馬鹿けている。

【注】昨年九月、イラクは査察団の無条件受

入れを表明し、二月に約二万二〇〇〇ペー

ジの申告書を国連に提出した。

## 侵

略の結果として何が起ころ

か。三つの可能性がある。

米国がすばやく簡単に勝つ。人

命の損失は最小限に抑えられる。

長期にわたる消耗戦のすえに勝

つ。かなりの人命が失われる。

ベトナム戦争のように負けて撤

退する。人命の損失は大きい。

すばやく簡単に勝つことが米国

政府の望みだが、そうはなりそう

もない。確率は二〇分の一だと思

う。長い消耗戦の後に勝つのが一

番ありそうだ。確率はたぶん三分

の二くらいか。本当に負けるとは

信じられないだろうが、（ベトナム

でもそうだったように）可能性は

ある。三分の一の確率だろう。

どの結果になるにせよ、米国の

国益は損なわれる。たとえ、す

ばやく簡単に勝つたとする。全世

界が息をのみ、人類は恐怖にふる

え、希望の光を失つだろう。米国

が世界に及ぼしている政治的影響

力を、これほど急速に低下させる

ものはほかにない。タカ派は勝利

によって米国が覇権を取り戻すと

言つが、実際は見る影もないほど

力が衰える。友好国を失い、孤立す

る。従つてもいくつがあるだろう

が、多くの国々が怒りを募らせる。

簡単に勝つたとしても、その後

イラクをどうするのかが、イラクを

分裂させることはない、トルコ

やヨルダン、たぶんサウジアラビ

アにも約束したはずだ。だが、そ

の約束を守るのだろうか。

そのためにはイラクに植民地総

督を駐在させ、少なくとも二〇万

人の兵力を配備し、（一九四五年か

ら日本でそうしたように）長期に

わたつて占領状態を維持する必要

がある。しかし米国にその考えは

ない。そんなことをすれば「国内

の支持を失い」きわめてまずい結

果を招くからだ。侵略後のイラク

は、九〇年代初頭のボスニアのよ

うに、内外から抗争をしかける各

民族勢力の餌食となるだろう。

イランはどうするのか。イラン

と友好的な関係になるのか、それ

とも侵略するのか。現時点で米国

は決めることができない。いずれ

にしてもイラクが負ければ、イラ

ンはおいしいところを全部もって

いくつもりだろう。実際、イラン

はイラクの分裂を望んでいる。

いわゆる穏健派のアラブ諸国が

叫び続けてきたのは、こういこと

だ。「米国がイラクを侵略する

と、自分たちの政府が「民衆の抵

抗に」脅かされる。もう生き残れ

ないかもしれない。それからイス

ラエル・パレスチナ問題がある。

この抗争の解決は今でさえきわめ

て難しいのに、それがほぼ不可能

になる。「これは当然な意見なの

で、米国政府が信じないのが不忠

議に思える。イラクを侵略すれば、

イスラエルとパレスチナ双方のタ

カ派が勢力を強める。誰が何を提

案しようとも、彼らは交渉に応じ

なくなるだろう。

つぎに、二番目にあげた最も高

い可能性を考えてみよう。いつま

でも続く流血の戦争である。激情

にかられやすいタカ派が夢に見る

ように、イラクが「爆撃で石器時

代にもどる」可能性は十分にある。

ことによると、核攻撃で石器時代

にもどる「かもしれない。

その際、イラクは保有している

凶悪な兵器を使用するだろう。こ

のような兵器は、米国のプロバガ

ンダが主張しているほど数多くあ

るわけでもなく、破壊力も限られ

ているだろう。しかし、この兵器

を使用すると、中東全域（まず第

一にイスラエル）に膨大な数の死

傷者が出る可能性がある。兵士の

遺体が数多く米国内に送り返され

れば、国内で一般市民の抗議運

動が見る間に広がることになる。

戦争は世界の石油供給を乱すだ

けでなく、その経済的な負担は、

米国が世界経済に占める地位に影

響する。ベトナム戦争の時のよう

に、長期的な損害を受けるだろう。

もし核兵器を使い、広島と長崎で

犯した罪に新たな罪を重ねるなら、

倫理的な責めを負わねばならない。

世界の世論が静まるのに五〇年は

かかるだろう。そんな具合で、最

最終的に米国が勝つたとしても、次

にどうするかという同じ問題が残

る。「長期の占領を」やる気は、な

おさら起きないだろう。

三番目の可能性は敗北である。

未来の世代がどう判断するかを考

えるだけでも恐ろしい。ワシント

ンで政治に関わるすべての人びと

が非難されるだろう。深刻な結果

を招くとは思っていないが、敗

北の可能性を考えるのを避けてい

たと答えるのか。精神分析ではこ

れを否認とよぶ。

オサマ・ビンラディンにこれ以

上の願ひ事があるだろうか。

（時事評論第九六 二〇〇二年九月一日）